



永田 円了  
真国寺住職



いまオリンピックは、ロサンゼルス大会以降で最も大きな危機を迎えている。ドーピングをしている一流アスリートは全体の14〜39%に及び、薬物検査では検体の1〜2%にしか禁止薬物が見つかっていない。オリンピックをドーピングから救うには、時代を画すような変化が必要という(フィナンシャル・タイムズ2016)。

自己実現のお面をかぶった「自我実現」の暴走に、なにか手だてはないのか。オリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く」(国際オリンピック委員会が定めたオリンピック憲章)、果たしてこれいいのだろうか。人間社会の理想を実現するためには、何かが欠けている。

### 五輪の危機

ドイツの哲学者ハンス・レンクは、オリンピック憲章に次の二つのモットー「より美しく、より人間らしく」をプラスする必要があるという。今年のリオ五輪女子5000円で、転倒した2選手が助け合い、足を引きずりながらも共に最後まで走り抜いた姿に心うたれた。レース

の中盤、密集した集団の中で、ハン布林(ニュージーランド)が転倒。すぐ後ろで巻き込まれたダゴステイノ(米国)がハン布林に手を貸し、ともに立ち上がって走り出したが、右ひざを痛めたダゴステイノは再び転倒。今度はハン布林が手を添えて2人は最後まで走りきった。2人はこの日が初対面だったという。

競歩はおもしろいスポーツである。「より速く」というなら走るべきなのに、なぜ歩く？直立二足歩行は、あらゆる生物のなかで人間だけが身につけた技術である。その技術を磨き、洗練させた競技が競歩なら、それはリンクがいう「より人間らしく」に合うスポーツと言える。

自我は一番になるためには、「より速く」ゴールを目指そうとする。金メダルを手にするためなら、ドーピングという手段さえいとわない。まして転んだひとに手を貸すことなど、論外なのである。しかしこの2人のアスリートの行動はなんとも美しい！

最後にもう一つ。パラリンピックをぜひオリンピックと融合した形で行うことを提案したい。オリンピックの閉会式を盛大にした後にパラリンピックを付け足すのではなく、健常者も障がいをもつ人も、同時進行でそれぞれが共に人間のもつ本来のチカラのベストを発揮する、そんな世界大会にしたらどうだろう。「より人間らしく」を発揮するためにドーピングする人はいないだろうか。

## 「より人間らしく」を

最後にもう一つ。パラリンピックをぜひオリンピックと融合した形で行うことを提案したい。オリンピックの閉会式を盛大にした後にパラリンピックを付け足すのではなく、健常者も障がいをもつ人も、同時進行でそれぞれが共に人間のもつ本来のチカラのベストを発揮する、そんな世界大会にしたらどうだろう。「より人間らしく」を発揮するためにドーピングする人はいないだろうか。